修復による発見とチャレンジ

修復過程

1 技法や状態の調査、写真撮影、計測、破損状況の記録

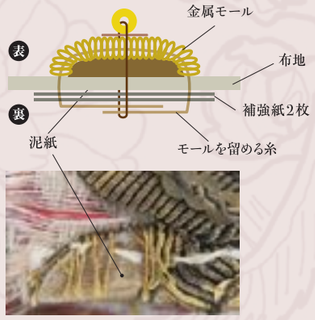
2 裏地を取り外す

3 補強のための絹地をトレインの生地の裏に当て、表の損傷した糸を駒縫で留める

4 外れた刺繍のモール糸やスパンコールを留める

刺繍の仕組み

モール糸を盛り上げるために泥紙が挟まれています。また、生地の裏には補強ための和紙が2枚入っています。



モール糸が外れ、泥紙が見える拡大写真

修復の課題

外れた金属糸を留めることはとても困難な作業です。紙が硬く、針を通すことが難しく、生地の裏から針を通そうとすると見当を間違い他のモール糸を押し上げる可能性があります。国内外の修復専門家に修復方法を相談し方針を決めます。

反転させた画像

元の風合いを保ちながら如何に修復保存するか

裏紙を読み解く

刺繍の裏には、重厚な金属刺繍のモール糸を補強するために和紙が使われていました。新しい紙ではなく、文字などが書かれていた反故紙でした。修復中の補強和紙の発見は日本で刺繍がされたことの証拠です。また、その和紙に書かれた文字を読み解くと、和紙が横須賀海軍造船所の遣払帳(つかいばらいちょう)で、明治11年に起工し、明治16年に進水した初代の木造船「天竜」を建造した頃のものであったことがわかりました。

美しい大礼服の不可解な傷み

経糸の著しい劣化

特に、畳んだところやプリーツがあったところ、刺繍の裏にある和紙の周辺に傷み、切れ目がみられます。

糸の謎

経糸の劣化により、緯糸が浮いています。なぜ経糸のみが劣化したのでしょうか？

経糸が劣化し、緯糸を駒縫いで留めた拡大写真

明治の「超絶技巧」に挑む現代の修理技師たち

(株)染技連 文化財修理所での作業の様子。

白織文様の花葉に沿って施された刺繍

赤色などで織られたバラの花や蕾、その周りは白地に白色のバラ文様で織り上げられ、光沢のある絹地は光の角度により文様が浮かんで見えます。
トレインの下部や周縁は白色で織られたバラ文様の上に金属製のモール糸で刺繍が施されました。
赤や黄色のバラの周りは、光り輝く金銀銅の立体的な花や葉に囲まれ美しさが際立ちます。

多彩な織り文様

トレインの華麗な文様は全て織で表現されています。赤、黄、ピンクなどで大小のバラを散らし、織り幅全体を使い文様が構成されています。

大礼服の不思議 なぜ？ いつ？ どこで？

When?

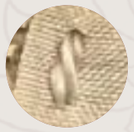
制作｜この大礼服のスタイルは、小さめのバッスル、前後が“V”字型のボディスに、特徴的な袖(幅広の下部、肩の上で重なり合う上部)です。研究者によると大礼服の制作年は明治21年～23年と推測されています。

着用の行事｜明治20年、新年拝賀の時に、男女共に洋装の大礼服を着用することが決まり、正装した宮廷の人々とともに外国の代表団が拝謁しました。この大礼服も新年拝賀で着用されたのでしょうか? あるいは明治22年の憲法発布式で「バラ色の洋服をお召しになった皇后」と、拝謁したドイツ人のお雇い外国人、ベルツやフォン・モールが日記に書いていますので、この礼服のことでしょうか?

Where?

生地｜同じような文様・織幅・織組織の生地は他では見つかっておらず、欧米の染織専門家たちによると、「日本製では」という意見が多くあります。しかし、このような大胆で複雑な文様はその当時日本で使用していたジャカード織機で織ることは不可能だったと思われます。昔ながらの空引きで織ったのでしょうか? 疑問が残ります。

裁縫｜当時の大礼服は、ヨーロッパで作られたものの記録もありますが、明治21年御所内で大礼服を縫ったという記録も宮内庁書陵部に残っています。日本で作られた証拠として、ヨーロッパでは使われていない2本撚り糸の特徴ある縫い糸が使われていることもあげられます。縫い方も当時のヨーロッパとは若干違います。



ヨーロッパでは使われていない縫い糸(ボディスの内側)

刺繍｜モール糸とスパンコールの刺繍の材料はフランス製と思われますが、手仕事は日本でされたようです。